

僕の気持ちは複雑だった

年を取ると人は忘れっぽくなり、昔の若い時のことなんか、余程の事でないと、覚えていないだろう。

わざと、忘れたいことも一杯あるだろう。

年を取った僕が、この日記を手にして、どんな気持ちで、この日記を読んでいるかな。

この日記、あるかな？
もう、どこかに棄てられて、ないかな？

六十才になり、よぼよぼになり、もうろくした僕が、この日記を読んでいる姿を想像する。
多分、眼鏡かけているかな。

六十才と言わなくても、四十で、どうかな。
まだ、僕は生きているかな？
生きていたいなあ。

もし、タイムマシンがあるなら、未来の僕、四十才、五十才、六十才の僕と、この日記帳で交信したい。
六十才の未来の僕に教えてほしい、何か、今の僕に、伝えたい事があるなら、今、この日記帳に書き込んでほしい。
それを今の僕は読みたいなあ。

いいや、やっぱり、読みたくないなあ。
自分の未来なんか、やっぱり、知りたくない。
その時が来る迄、楽しみにしていたい。
その時が来る迄、未来は現実にならない方がいい。